「男、突っ走る！」

第55回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（21）	名古屋芸術専門学校３年生	
木内　孝志（50）	雅也の父	
眞榮田　浩平（21）	名古屋芸術専門学校３年生	
福本　瑞枝（21）	名古屋芸術専門学校３年生	
大久保　正樹（25）	名古屋芸術専門学校３年生	
宮田　春奈（21）	中央高校元生徒	
鬼頭　美彩（21）	中央高校元生徒	
五十川　孝之（21）	中央高校元生徒	
本部　明美（20）	名古屋カフェ調理専門学校２年生	
鈴島　孝雄（54）	名古屋芸術専門学校入学事務局長	
藤澤　聡（34）	カメラマン	

1　ラーメン屋

雅也、春奈、美彩、孝之がラーメンを食べながら話している。

雅也「一昨日、居酒屋で飲んだばっかなのに、まさかまたこの四人で集まるなんて思わなかった」

美彩「本当は、私と五十川と六組のメンツで集まることになってたんだけど、急遽予定変更になっちゃったの。それなら、せっかく五十川がこっちに帰ってきてるのにもったいないから、急だけど四人で集まろうかなと思って」

五十川「木内さん、忙しいのにすいません」

春奈「昼から学校行くんでしょ？」

雅也「まあ、自習しに行くだけだから、別に急がないけどね。全然ゆっくりできるから大丈夫」

美彩「パンテーンも、今忙しいんでしょ」

春奈「確か、フリーペーパーの連載やって、そこの学生事業部長なんでしょ」

雅也「うん。大学生の子も集まって、何とか組織としては成り立ってるかな。それに、学校のほうじゃ去年同様、歴史雑誌の編集長やることになってね。おかげで、締切に追われて、夏休みも何もあったもんじゃないわ」

五十川「けど連載とはすごいですよね。さすが木内さん」

雅也「俺も美彩も春奈も、今年が学生生活最後の夏休みでしょ。せめてラストイヤーぐらい、遊びほうけたいなって思ったんだけど、なかなか現実はそうは行かなくて」

春奈「ちゃんと私たちの集まりには来てくれてるじゃん。それだけで十分よ」

雅也「一昨日あったばかりだと思ったけど、よくよく考えたら、高校の時はほぼ毎日顔合わせてたもんね。せっかく高校時代のメンバーが集まるんだもの、どんな都合つけたって来るに決まってるじゃん。それに今日は、五十川君の新車で送迎してもらって、

どれだけありがたいか」
美彩「まさか五十川の車で、名古屋までドライブするなんて思わなかったけどね」
春奈「まあでも、こういう時じゃないと五十川の車にも乗れないんだもん。ある意味では良かったかもしれないよ」
雅也「（五十川に）本当に良かった？　何なら、ガソリン代ぐらいなら出すけど」
五十川「いえいえいえいえ、そんなこと。安全運転で、木内さんを学校まで送り届けます」
雅也「そりゃどうも」

2　高速道路

五十川の運転するスポーツカーが走っている――助手席に美彩、後部座席に雅也と春奈。

3　名古屋芸術専門学校・表

スポーツカーが止まり、後部座席から

雅也が降りてくる。

雅也「ありがとう」

運転席の五十川、助手席の美彩、後部座席の春奈が顔を出して、

美彩「こちらこそ、急でごめんね」

春奈「またね」

五十川「自習、頑張ってくださいね」

雅也「気を付けてね。それじゃあ」

一同「バイバイ」

と、五十川のスポーツカーが発信していく――手を振って見送る雅也。

4

同・1階・ロビー

雅也がエレベーターのボタンを押す――奥の入学事務局から鈴島がやってくる。

雅也「お疲れ様です」

鈴島「お疲れ様。あ、木内君、ちょっと待ってて（と事務局へ戻っていく）」

雅也「はい？」

鈴島、新聞を持って出てくると、

鈴島「これ、学校新聞、無事にできあがりました」

雅也「ありがとうございます」

鈴島「良い記事だったよ」

雅也「こちらこそ、貴重な体験させていただきました。ありがとうございました」

鈴島「連載小説やフリーペーパーの制作も、上手くいってるみたいだね」

雅也「まあ、何とか。デビューってなると、一つひとつの実績が大事になってきますからね」

鈴島「頑張ってよ」

雅也「はい」

5　同・4階・廊下

雅也がエレベーターから出てくる――

ベンチで瑞枝が菓子パンを食べている。

雅也「お疲れ、みずちゃん」

瑞枝「お疲れ。今日は遅いんだね」

雅也「うん。高校の時の友達とご飯行ってたの。そのまま、学校まで送ってもらっちゃった」
瑞枝「そうだったんだ」
雅也「みずちゃん、体大丈夫？　何か、顔の血色が悪いような気がするんだけど」
瑞枝「え……やっぱり、顔に出てる？」
雅也「何かあったの？」
瑞枝「実はさ……梶川と別れたの」
雅也「え……？」
瑞枝「私も、恋愛は向いてないのかもしれない。眞榮田のこと、悪く言えた立場じゃないわ」
雅也「……」
瑞枝「まあ、それでも半年は持ったけどね」
雅也「うちの学校のカップルでいえば、長いほうか。短いのだと、一ヶ月とか三ヶ月で別れるカップルもいるもんね。誰とは言わないけど」
瑞枝「うん……」

雅也「まだ、未練あるの？」
瑞枝「無いといえば、嘘になるかな……」
雅也「そっか……」
瑞枝「……」
雅也「今日は、早く帰ったら？」
瑞枝「うん」
雅也「本当、恋愛に関する問題があるね。特にうちの代は」
瑞枝「うっちーこそ、いろいろ追われすぎて大変なんじゃない？　うっちーも何か疲れてるような気がするけど」
雅也「どうかな」
瑞枝「身体は正直だよ」
雅也「今日は、お互い早く帰りますか」
瑞枝「そうだね……」
　と、雅也のスマホに着信が来る。
雅也「（電話に出て）はいはい、どうした？　え……？」

6　同・表

孝志が待っている――雅也と瑞枝が出
てくる。
雅也「どうしたの、一緒に帰るだなんて」
孝志「今日、出張でこの近くのビルにいたん
だよ。それで、母さんに聞いたら、今日も
お前学校に行ったって言うから」
雅也「そっか。（と瑞枝に）あ、うちの父親。
（と孝志に）映像専攻のみずちゃん。たま
に『とんちゃん』一緒に行ってる」
孝志「ああ、何か言ってたな。（と瑞枝に）
息子がいつもお世話になってます」
瑞枝「いえ、私のほうこそ、いつも助けても
らってます」
雅也「（瑞枝に）途中まで一緒でも大丈夫？」
瑞枝「全然良いよ」
孝志「よし、じゃあ帰るか」
と、歩いていく雅也、瑞枝、孝志。

7　木内家・雅也の部屋（夜）
雅也が原稿を見ながら、赤ペンでチェ

ックをしている――疲れるようにメガネを取り、あくびをすると、ベッドに横たわる。

8　名古屋芸術専門学校・全景（数日後）

9　同・屋上

雅也と、煙草を吸っている正樹が話している。

正樹「悪かったな、バーベキューの準備、全部任せることになっちゃって」

雅也「（苦笑して）気にしないで。元々、今回のバーベキューは、俺と眞榮田がやりたいって言い出したんだもん」

正樹「機材は、学校から借りるんだろ？」

雅也「うん。それで、明日眞榮田が車で学校に来ることになってる」

正樹「そっか」

雅也「とにかく、今回は俺と眞榮田で設営するから、大久保はゆっくりしてて」

正樹「はいはい」

10　テレビ局・全景（夜）

11　同・表

雅也が待っている――ドアが開き、仕事帰りの浩平が出てくる。

浩平「お待たせ」

雅也「ごめんね、今日はお世話になります」

浩平「休むことも大事だ。今日は、ゆっくりくつろげ」

雅也「うん」

12　居酒屋（夜）

雅也と浩平が飲んでいる。

雅也「へえ、ここでバイトしてたんだ」

浩平「今はたまにヘルプで呼ばれることがあるんだけどね」

雅也「なるほど。どうりで、学園祭の時、焼き鳥焼くの上手いなあって思ってたんだよ」

浩平「あ、学校新聞読んだよ」
雅也「ありがとう」
浩平「着実に、物書きとして実績積んでるじゃねえか」
雅也「まあね」
浩平「これで、脚本としてのデビューが決まれば良いけどな」
雅也「うん。キャリアセンターからの求人メールだって、全然当てにならないし」
浩平「俺はさ、今のテレビ局の下請けの制作会社で大久保と一緒に就職が決まっただろ。それなのに、一斉メールでいまだに一日に何通も求人募集メール送ってくるから、進路が決まった人にまで送るのはやめてくれって、文句言ってやったんだよ」
雅也「さすがは、眞榮田だ」
浩平「（腕時計を見て）九時になったら出るか。風呂屋で一時間ぐらいいたら、良いぐらいになるだろ」
雅也「うん」

13　眞榮田家・全景（夜）

14　同・浩平の部屋

雅也と浩平が眠っている。

雅也「眞榮田」

浩平「どうした？」

雅也「ありがとね、今日は」

浩平「良いってことよ」

雅也「一応県外じゃん。だから、小旅行みたいな気分で、すごく楽しかった。友達の家に泊まるのは、これで二度目だけど、新鮮だわ」

浩平「二度目？」

雅也「去年自主ドラマの撮影のリハーサルで、夜中までかかっちゃったんだよ。その時、大久保の家に泊めさせてもらってね。あれが、友達の家に泊めてもらった初めての経験だったの。小学校から高校まで、友達の家でお泊りすることなんてなかったから」

浩平「そうだったのか」

雅也「学生最後の夏休み、楽しめる時間があるうちは、遊ぶことにも時間をかけることにする。だから、お盆明けのバーベキューだって、どれほど楽しみにしてることか」

浩平「学生生活最後のバーベキューだ。俺とうっちーと大久保で、後輩たちを楽しませてやらないとな」

雅也「楽しみだな、バーベキュー。あ、またチーズケーキ持ってくから」

浩平「お、うっちーのチーズケーキ、久しぶりだな」

笑いあう雅也と浩平。

15　道

軽自動車が走っている――運転席に浩平、助手席に雅也。

16　名古屋芸術専門学校・表

浩平の軽自動車が停車している――バーベキューセットを運んでいる雅也と

浩平。

17　香嵐渓・全景

N「お盆明け、僕と眞榮田主催によるバーベキューが開催されました」

18　同・河川敷

肉を焼いている浩平と手伝っている後輩たち――雅也が野菜を切っている。

×　×　×

水遊びをしている雅也、浩平、正樹、その他後輩たち。

N「学生生活最後の夏休みは、全力で楽しもうと決めた僕にとって、このバーベキューは楽しい思い出の一つとなりました。そして、その数日後には、姉妹校であるカフェ調理専門学校に通う明美ちゃんから、ビアガーデンに誘われました」

19　ビアガーデン会場（夜）

雅也と明美が、ビールを飲みながら話している。

明美「先輩。どうして、うちの学校のキャリアセンターってのは、ポンコツなんですかね」

雅也「どうしたの？」

明美「当てにならないんですよ。マナー講座で習ったことと、キャリアセンターの担当者の言ってることが違ってて」

雅也「なるほどね」

明美「履歴書や自己ＰＲだって、アドバイスらしいアドバイスなんて全然くれないし」

雅也「ああ、それなら俺が添削しようか？」

明美「そっか。先輩、文章のプロっすもんね」

雅也「まあ、それを書いたから必ずしも受かるとは断言できないけど」

明美「それでも、キャリアセンターの奴に直されるぐらいなら、これほど有難い話ないですよ」

雅也「じゃあ、今度そっち行くわ」

明美「お待ちしてます。（と雅也のグラスを見て）あ、先輩何か飲みます？　持ってきますよ」
雅也「じゃあ、焼酎の水割りで」
明美「はーい」
×　×　×
明美がグラスを運んでくる。
明美「はい、焼酎水割りです」
雅也「ありがとう。（と飲むと険しい顔になり）ん？」
明美「どうしました？」
雅也「これ、焼酎の水割りだよね」
明美「そうですよ」
雅也「何か、濃くない？」
明美「気のせいじゃないですか？」
雅也「あ、明美ちゃん、原液多めにしたでしょ」
明美「バレました？」
雅也「これは、酔っちゃうって」
明美「酔え酔え、先輩」

雅也「こいつぅ」

苦しそうに酒を飲んでいる雅也。

N「初めてのビアガーデンでしたが、明美ちゃんが楽しく盛りあげてくれたことで、これもまた楽しい夏休みの思い出となりました。そして、数日が経ち、九月に入ると……」

20　喫茶店

N「僕は、ネットの募集告知を見て、ある方にコンタクトを取りました」

雅也がコーヒーを飲んで待っている――ドアが開き、リュックを背負った藤澤聡（34）が入ってくる。

藤澤「あの、木内さんでしょうか？」

雅也「はい。あの、もしかしてカメラマンの藤澤さんでしょうか？」

藤澤「はい」

雅也「ご連絡をしました木内雅也です」

藤澤「どうも遅くなりまして。藤澤聡です

（と名刺を出す）」

雅也「いきなりメール差し上げて失礼しました。ただ、自主映画の制作と脚本補助を募集していると、文面を拝見したもので」

藤澤「そうなんです。僕は普段カメラマンをしておりまして、自主映画は趣味みたいなものなんですが、どうせやるなら力を入れたいと思い、映画祭への応募も考えてるんです。確か木内さんは、専門学校でシナリオを勉強されてるとか」

雅也「ええ。今も、脚本コンクールに出したり、制作会社にポートフォリオを送付して売り込み活動をしてるんですけど、これがまたなかなか良い結果にならなくて」

藤澤「そうですか。でも、脚本を専門的に学んでいる方が、補助をしていただけると助かります。映画作りは、経験ありますか？」

雅也「去年、映像専攻の友達と十分ほどの自主ドラマを作りました。まあ、経験とは言えないかもしれませんが」

藤澤「いや、何も知らないよりかは、そうやって自分たちで現場経験をしてるだけでも、ありがたいです。よろしければ、また作品を見させていただけませんか？」

雅也「はい」

21　公園

自主映画の撮影中――藤澤がカメラで撮影をしており、雅也が音響マイクを握っている。

藤澤「よーい、スタート」

N「僕は藤澤さんの自主映画製作に携わることになりました。脚本補助だけでなく、音響や制作といった裏方全般、そして通行人エキストラまですることに。そして……」

22　名古屋芸術専門学校・５階・廊下（数日後）

雅也がスマホで話している。

雅也「え、それ本当ですか？」

藤澤の声「そうなんだよ。大阪のモデル事務所が制作してるYouTubeドラマで、僕がカメラ担当をしてるんだ。ちょうど、本が書ける人を探しててね。原案は、向こうが決めて、それをもとに脚本にしてほしいんだ」

雅也「分かりました。ぜひ、やらせてください」

N「藤澤さんから連絡をいただき、僕は思いがけず脚本の依頼を受けることにしました」

23　同・屋上（一ヶ月後）

スマホで動画を見ている雅也。

N「そして一ヶ月後。僕が脚本を務めたドラマが、YouTubeで配信されました。藤澤さんと出会いが、僕を脚本家デビューへと繋がっていったのでした」

つづく